

## 婪り (辻邦生)

來住 翔太、千葉 大暉、溝口 智大、柳井 光一



### 一 作者と作品について

辻邦生（一九二五～一九九九）は東京の駒込西片町に生まれる。日本大学第三中学校、旧制松本高等学校へと進学している。一九四九年に東京大学文学部仏文学科に進学。大学院へも進学している。その後立教大学や学習院大学に勤めた。

一九五七年からパリへ留学している。留学中に「見知らぬ町にて」の第一稿、「城」、「ある晩年」、「影」を執筆する。一九六三年に「廻廊にて」で第四回近代文学賞を受賞、一九六九年に「安土往還記」で芸術選奨新人賞、一九七三年に「背教者ユリアヌス」で第一回毎日芸術賞、一九九五年に「西行花伝」で第三二回谷崎潤一郎賞を受賞した。

「婪り」は、短編集『風の琴 二十四の絵の物語』（一九九二年）に収録されている。これは、題名の通り、二十四枚の絵にまつわる物語が綴られている。「婪り」は、「フェデリゴ・モンテフェルトロの肖像」（ピエロ・デラ・フランチェスカ）から作られた物語である。肖像画による物語は第十二までで、「婪り」は「第十一の物語」である。風景画から作られた物語が、「第一の旅」から「第十二の旅」まで、以降十二話続く。前半十二話が人物画、後半十二話が風景画を題材としている。「第一の物語」が一九八〇年三月刊行のものに掲載されて以降、「第十二の旅」が一九八四年二月刊行のものに掲載されるまで続いていた。

### 二 叙述について

ある冬の寒い夜のことであった。

季節は冬、時間は夜と、舞台の説明から入っている。

ウルビノのモンテフェルトロ公の宮殿で、夜伽の廷臣たちが、暖炉の火に当たりながら、よもやま話に花を咲かせていた。

前文と併せてこの物語の舞台説明の役割を果たしている。ここでは、「宮殿」や「廷臣」という語から、王族、もしくは貴族の館が舞台であろう。また、中世のヨーロッパのイメージを彷彿とさせる。

夜伽とはいいい条、彼らはただ夜の一定時間、公の寝所の周りを見回るだけで、あとは非番も同様だったのである。

この「廷臣」たちの仕事は警護であるにもかかわらず、見回りもそこそこに油を売っている。また、言い回しから、普段の「夜伽」も同じような状況であったと推測される。

もう夜半に近いころ、廷臣たちは奥の廊下から聞こえる足音に、思わず話をやめた。

「思わず」とあることから、「廷臣」たちが驚いていることがわかる。自分たちが「非番も同様」に「話」をしているときに、普段聞こえないはずの足音にさっと耳をそばだけると同時に、気を抜いていた故の焦りも感じさせる記述である。

足音の主は、ほかならぬモンテフェルトロ自身だった。

「ほかならぬ」という語が、「モンテフェルトロ」という宮殿の主の存在を強めている。

遠くからおまえたたちの話し声を聞いていると、いかにも楽しそうなので今夜は、こうして話の仲間入りをさせてもらおうと思つてやつて来た。

「遠くから」や「いかにも楽しそう」などの表現から、この時点ではやや皮肉じみたニュアンスを含んでいる。

そのせいか、公がそこに姿を現すと、名うての話し手をもって任じていた廷臣たちも急に自在に物語る能力を失って、ただばちばちはぜる薪の炎を見つめるほかなかった。

「名うての話し手」とあるように、廷臣たちの中にも話し上手なタレントがいたことがわかる。しかしながら、そのような人物でさえ「自在に物語る能力を失って」とあるのは、仕事を全うしておらず、それをモンテフェルトロに知られたばつの悪さからか。また、廷臣たちは、自分たちの「話」がモンテフェルトロの睡眠を妨げたと思っており、その申し訳なきも一因であると思われる。

モンテフェルトロ公は、鼻梁の付け根から突出した鼻に指を当て、息の

通りを試すように、二度ほど、ふんふんと息をした。

「息の通りを試すように」とあるので、これから話をする準備をしている。「二度ほど、ふんふんと」とあり、入念に行っていることから、物語が長くなるのかもしれないということも表している。

廷臣たちはそう言つてひざを乗り出した。

「ひざを乗り出した」とあり、これまでモンテフェルトロに対して抱いていた罪悪感や焦りもあつてか、せめてモンテフェルトロの物語だけは熱心に聞こうという姿勢を見せている。もしくは、うわべを取り繕っているのか。

「いいえ。」

少し英語のような表現。現代の標準的な受け答えからすれば「はい」と答えるところを、ここでは「いいえ」と答えている。質問にあつたような事実がないために、そういう表現をしているのか。

空を斜めに切つて、野鴨が、まるでつぶてでも投げたように落ちてきたのだ。

「つぶてでも投げたように」は二通りの解釈ができる。「つぶてを投げつけられたように野鴨が落ちてきた」のか、それとも「投げられたつぶてのように一直線に野鴨が落ちてきた」のか、である。ここでは、「空を斜めに切つて」という表現から、後者であると解釈する。

私はそれを抜き、野鴨を上着の懐に隠した。

モンテフェルトロの性格の表れか。だとすればここでは、「優しい」も

しくは、「気まぐれ」だといえる。

まもなく、猟犬の音がしたかと思うと、四、五人の男が馬を並べて走ってきて、この辺に鳥が落ちるのを見なかつたか、と尋ねた。

「猟犬」や「馬」という語から、男たちが馬に乗って狩りをしていくことがわかる。モンテフェルトロは、鳥に刺さった矢を見て、狩られた鳥であると判断していたことがわかる。

もちろん理由などはなかつた。

「もちろん」とあることから、鳥をかばったのは全くの気まぐれである。しかしながら、この考察は、現時点で表現されている事実からの読み取りに限る。後に出てくる表現から読み取るモンテフェルトロの心情についてはその都度述べることにする。

ただ枯れ草の上でのた打っている鳥が哀れに思えたのだ。

「ただ」と、前文で理由は無いとしながらも、ここで理由と考えられるものが挙げられている。

私は城に戻ると、自分の部屋で野鴨の手当てをした。

狩人たちから野鴨を隠すだけではなく、手当をし、傷を治すつもりで野鴨を助けていたことがわかる。ここまでの表現から、前述の「まったくの気まぐれ」というのは当てはまりにくい解釈となっている。

野鴨は、私が作った巢の中で身動きしなかつた。

「身動きしなかつた」とあるので、野鴨もモンテフェルトロに対し、

警戒心を抱いていない。

冬の夜半の風が暖炉の奥でごうごうと鳴っていた。

「夜半に近いころ」から「夜半」へと時間が経過している。また「ごうごう」という語から、風が強いことを示している。

一度、窓のそばに置いてやったが、そのときは何か考えるようにして、羽を動かそうとしなかつた。

「羽を動かそうとしなかつた」とあるので、ただ単に羽が治っていないことを示しているのか。または「何か考えるようにして」とあるので、この野鴨が本当に何か考えているのか。後者だとすれば何か特別な野鴨であるともとれる。

野鴨が城の窓を飛び立って仲間たちのいる沼に戻って行ったのは、それからさらに十日ほど後のことだった。

傷が癒えるのに全部で二〇日ほどかかっている。

私は野鴨から解放されると、子どもながらに、ほっとした。

「ほっとした」とあるので、野鴨の世話を重荷に感じていたともとれる。しかし、「子どもながらに」という表現から、ただただ無事に飛び立ってくれた安心感を示しているともとれるのではないだろうか。

哀れな生き物を助けたという満足感はあるが、やはり多少親しみを分け合ったものと別れたという哀しさは残った。

「哀れな生き物」という表現から、自分が野鴨よりも上の立場にい

ることと考えている。城主、領主としての性格の表れか。また、モンテフェルトロ自身、野鴨に対して、世話を焼くうちに親近感を抱いていたこともわかる。

ある事件が、突然、その野鴨のことを思い出させたのだ。

「ある事件」や「突然」という言葉を、事件の内容を示す前に出すことで、聞き手に興味を持たせようとしている。モンテフェルトロ公の語りの上手さが出ている部分である。

延臣たちは、剛毅なモンテフェルトロ公の意外な面をかいま見る思いで、じっと公の物語に聞き入っていた。

「剛毅」とは、意思が堅くて強く、くじけないこと。そんなモンテフェルトロの「意外な面」ということは、意思が弱くて、折れやすい様子が想像できる。ここでは野鴨の世話にあたって子供のように無垢であったというモンテフェルトロの様子が、普段の様子とはかけはなれているということ。「かいま見る思い」とあることから、本来見るはずのない領域を、たまたま出来たすき間から覗くことができているという、特殊な体験をしていると延臣たちが感じている様子がわかる。その特殊さから、つい「じっと」「聞き入って」しまっている。

事件というのは、ほかでもない、当時、敵対関係にあったヴェネツィアから刺客が送られ、私の暗殺を謀るという出来事が起こったのだ。

「当時」とあり、事件が起きたのは過去のことなので、暗殺はなんとか免れた。

その日、私は夕刻、城に出かけることになっていた。

「その日」とは事件が起こった日。事件の日のことについて話し始めた。

ローマから来た大使の歓迎の宴が開かれるはずだったからだ。

この「はずだった」は、「開かれる予定があった」という意味で、「開かれるはずであったが、開かれなかった」という意味ではない。

ところが、昼ごろ馬場に出ようとすると、戸口で、ぱったり若い女に出会った。

「ところが」ということから、誰かと馬場で会うことは予定していなかった予想外のことであるとわかる。

身なりはそれほどいいわけではない。

予想外に出会った若い女を観察していることから、懐疑的になって、興味を抱いていることがわかる。

だが、さっぱりした衣服を着て、生き生きした表情をしていた。

それほどいいわけではないということも、「さっぱり」していると評価している。「生き生き」して、清潔感のある様子であると、モンテフェルトロは若い女に対して好印象を抱いている。

それぞれに優美な衣装をまとい、ものごとくしとやかだ。

「それぞれに」とあり、宮殿の女たちは、一人ひとりぜいたくに着飾り、上品な振る舞いをして、育ちの良い立ち居振る舞いをしている。

だが、私は、その若い女ほど新鮮な美しさを持った女に出会ったことはなかった。

「だが」と宮殿の女たちに対して逆説的・否定的に話している。美しく着飾り、上品で美しい所作ができる宮殿の女たちの中にも、この馬場にいる若い女のような、着飾りが必要としないさっぱりした美しさを持つ女はいないということ。それだけに、その「新鮮」さが魅力的に感じられている。

いかにもきれいで、さわやかな感じだった。

「いかにも」とあるので、若い女がどれだけ魅力的であったかを廷臣たちに説明している。

まるで、もぎたてのりんごのようだった。

「もぎたてのりんご」とは、つや・光沢がある、青々とした若さ・美しさを感じさせつつ、もぎたてのりんごのかじりつきたくなるジュージューで甘美なおいしさを持った女であることを想像させる比喩。

私は胸が楽しく弾んでくるのを感じて女に言った。

この女と出合い、こうして話していることがうれしく、興奮している。

——どうりで、君を知らなかったわけだ。

「どうりで」ということから、こんなにも魅力的な女性のことを自分は覚えていなかったのではなく、もともと知らなかったから見覚え

がなかったのだと納得している。それと同時に、「君」と知り合えたことに感動を表している。

私はひと目でその娘に夢中になっていた。

彼自身の心情を話している。「ひと目で」と言うことで、娘にのめりこむ勢いの強さ・速さを強調している。一目惚れをした。

この娘なら貴婦人にも育て上げることができる。

「この娘なら」ということから、他のどの娘でもないこの娘に、ただならぬ魅力と可能性を感じている。「育て上げる」ということから、この娘を自分の手で養い、世話をすることまで考えている。

古ぼけた貴族の血筋より、それだけ新鮮で、生き生きした血が流れているかもわからない。

「古ぼけた」ということから、貴族の血筋に対する嫌悪感が見取れる。そして、宮殿の女とは違う「新鮮」で「生き生き」としたこの娘にこそ魅力を感じている。

しゃべり方にも品がある。

それほど会話を交わしたわけではないのにこのように言っている。「にも」とあり、自分がこの娘に魅力を感じていることを肯定するために、娘の魅力的な点をさらに挙げている。

話す内容にも生まれながらの才知が感じられる。

「にも」とあり、娘に魅力を感じたことへのさらなる後付けの理由。

こういう女をめぐってどうしていけなからうか。

「どうしていけなからうか」と反語を用いることで、これだけの魅力を持った女をめぐることがいけなわけがないと強調している。「こういう」とは、これまでに挙げていた通り、とても魅力的な女性であるということ。

身分など問題ではない。

「公」という立場である自分が、貴族でもない庶民の娘などと結ばれることは、きつと世の慣例に反することである。しかし、「など」とあり、そんな身分の差は関係なく、この女と結ばれることがどうしていけないのだろうか、さらに強調している。

女のためなら何をしたらつかまわない。

女に、異常に魅了されている様子が見て取れる。「何をしたら」というのは、「この女と結ばれるためなら」とここでは解釈することができるのではないか。

要するに私は何もかも忘れた。

「何もかも」とあり、ローマの大使の歓迎会に行くことも、自分が「公」であるという立場にあることも、何もかも忘れて私は女に夢中になった。異常なまでの女へのめりこみ具合が分かる。

私たちは抱擁し、語らい合い、時のたつのを忘れた。

我を忘れ、時の経つのも忘れるほど、娘との時間を楽しんでいた。

気がついてみると、夜はもうすっかり更けていた。

「すっかり」とあり、夜が更けてしまうまで気づかないほど、昼からいた娘との時間は短く感じられており、いかに自分が夢中になって我を忘れていたかを表している。

もういまさら大使の歓迎宴に行っても始まらない。

一応大使の歓迎会があったことは覚えていたようであるが、「いまさら」とあり、これから行っても仕方がないとあきらめている。

だれか呼びに来れば病氣と偽ればいい——私は若い女の肩に手を回しその頬に唇を当てながら、そう思った。

大使の歓迎会に行くことよりも、この娘といることを選んだことに後悔している様子はない。「病氣と偽ればいい」程度の比重で考えている。それほど娘との甘美な時間に酔いしれている。

私はしびしび立ち上がって、戸口まで出た。

「しびしび」とあることから、娘との時間を遮られて不服ながらも、無視するわけにはいかなないので、嫌々訪問者に応じている。

扉の外には、父の重臣が四人立っていた。

モンテフェルトロが見た状況をその流れにそって説明している。

ただならぬけはいだった。

「ただならぬ」とあり、普段とは違う様子だった。モンテフェルト

口が娘といた間に何かとんでもないことが起こったことを予感させる。

——若君、ご身辺に変わったことは？

重臣の一人があえぎながら言った。私は首を振った。

「ご身辺に」とあり、モンテフェルトロ自身の身に危険を及ぼす何らかの事態が発生したことがわかる。「あえぎながら」ということから、とても焦りながら、確かめようと急いで来たことや、その必死さがわかり、事がいかに重大であるかを予感させる。

私が歓迎宴に出なかったのは……。

この三点リーダは、歓迎宴に出なかった理由をモンテフェルトロが考えている間を表している。また、理由を述べようとしたが、重臣のセリフで遮られたとも考えられる。

——お出にならなくてよかったのです、とほかの重臣が声を震わせて言った。

「声を震わせて」とあるので、ただならぬ事態が起こったことを示している。

——お従兄のマテオさまが……。

何が起こったのかを一気に伝えず、少しずつ伝えていくという形式をとることで、重臣たちがどれほどの衝撃を受けたのかを表している。また、伝えようとしている内容がモンテフェルトロに与える影響を考慮して、少しずつ伝えていとも考えられる。

——暗殺されました。

もつとも重要な部分である。前述した情報を少しずつ伝えているということからも、最後のこの言葉は絞り出すように言ったのではないかと考えられる。

——まさか……、と私は一步後ずさって叫んだ。

「一步後ずさって」とあり、マテオの暗殺は私にかなりの衝撃を与えたことがわかる。「まさか……」には、事実を知らされた衝撃に加えて、信じることができないという気持ちも反映されている。

父君が若君の代わりをなさるようにお言いつけになって……。

この場合の「代わり」は二通りの解釈ができる。一つは、文字通り姿の見えない息子の代役としての「代わり」。もう一つは、暗殺が決行される危険性に備え、息子の影武者としてマテオに「代わり」をさせた。後者の場合、暗殺に関する情報を事前に知っていた可能性があり、息子を守るためにマテオに影武者を演じさせたことになる。しかしながら、従兄ともなると位は高い。そのような立場の者に影武者をさせるとは考えづらいという見方もできる。

——おそれながら、そのように見受けられました。

重臣の目には後者に映った。

従兄には気の毒だったが、私は、女といっしょにいたために生命を救われたのだ。

女といっしょにいたために歓迎宴に出なかったというのは、人には

言えないような理由である。しかし、そのおかげで生命を救われたという事実もあるので、従兄に対して気の毒だという気持ちが生まれた。

もし女に会っていなかったら、もし女が私を夢中にさせてくれなかったら、私は、予定どおり歓迎宴に出ているに違いないのだ……。」

「のだ」とあり、女との出会いがあったために、今の自分があるということで、自分を納得させようとしている。

好奇心を抑えかねた若い廷臣が尋ねた。

モンテフェルトロにとっては従兄を亡くすことになった事件であるが、廷臣たちにとっては、「抑えかねた」とあり、好奇心を揺さぶる不思議な出来事である。

ぬれた野鴨の羽が二枚ほど落ちていたのだ……。

どこにも女がいた形跡はなく、唯一、野鴨の羽が落ちていた。ここでこの不思議な話は終了する。

廷臣たちは目と目を見合わせた。

驚きでお互い目を合わせた。この不思議な出来事が何だったのかを悟った廷臣もいたのかもしれない。

わが殿は善き心のほかは何も持っておられないのでございませぬ。

この不思議な話は、モンテフェルトロが子どものころに助けた野鴨の恩返しであると廷臣たちは考えた。加えて普段のモンテフェルトロの様子からも、善き心だけを持っているという発言につながった。

「そう思われては困る。」

「困る」とあり、しかし、モンテフェルトロにとってはそのように思われるのは心外であった。

人間とは複雑な化け物なのだ。

「なのだ」と、このように言い切ることができるということは、他人だけでなく、自分自身にもこのような点が存在するということを自覚している。

人間ほど混沌として始末に負えないものはないのだ。

人間ほど、はつきりせず手に負えないものはない。「混沌として」とあり、表と裏の二面性を持っているのが人間であると考えている。

普段人々は私のことを我慢強い温厚な男だといっている。

多くの人に慕われている現在のモンテフェルトロへの人々の評価。

だが、私が、傭兵隊を率いてイタリア中を走り回っていたころ、人は、私を血に渴いたおおかみだといったものだ。

対して、傭兵隊を率いてイタリア中を転戦していたころのモンテフェルトロの評価。「血に渴いたおおかみ」とは、血を欲してあちこちを転戦している非常に好戦的な性格の人物であるということの比喩。

私が宮廷でも寡欲を説くので、人々は本来、私が欲のない男だと思っている。



人々の目には欲のない男であると映っている。

だが、そうでないからこそあえてそう説いているのかもしれない。

しかし、自分は欲にまみれた人間であると自覚しているから、逆にこのように説いているのではないかと考えている。「かもしれない」とあるので、モンテフェルトロ自身もはつきりと分かっているわけではない。

公は言葉を切って、何かを思い出すような表情をした。

「何か」とは、サルツアナの戦いの際、兵糧攻めにあつた過去の記憶である。ただし、自分が兵隊に食料を分けたという美德を象徴するエピソードではなく、「饗宴」で一人むさぼっていた食欲さを露にするエピソードの方が主であると考えられる。

もうとりでの中の物は何もかも食べ尽くした。

「もう」とあることから、「何もかも食べ尽くし」てからの時の経過を強調し、空腹に苦しんでいた様子が想像できる。

ねずみでも一匹顔を出そうものなら、それを捕えようというので大騒ぎになったものだ。」

「ものなら」というのは、一般的に、もし実現したら好ましくない事態が起こるといふニュアンスを仮定的に示す。好ましくない事態とは、ねずみを捕まえ、食べることであるが、「捕えよう」と意思の意味を含ませることで、そうするほかにないという状況がわかる。また「顔を出そう」からは、現れるとするより、食べることへの必死さが読み

取れる。

ただそのとき、モンテフェルトロ公だけが乏しい食糧を兵隊に分けて、パンひと切れも口にされなかったとか……。」

「廷臣」は、サルツアナの戦いの話を、モンテフェルトロの勇ましく、我慢強く、臣下を大切に思う優しい性格を象徴するエピソードとして、捉えている。「……」とあるのは、伝聞したことであるからと考

える。

「そのことだ、私が話したいのは。」  
倒置法を用いることで、「そのことだ」を強調している。「私が話したいこと」が、食糧を分け与えたエピソードに関係があることであることを示し、焦点化している。

公はゆっくりとした口調で話を続けた。

「ゆっくりとした口調」とあるので、落ち着いている様子が分かる。また緊張感も感じられる。

確かにその結果、部下たちはだれ一人兵糧攻めに泣き言をいう者はなかった。

「確かに」という語は、その後の展開に含みをもたせるものである。例えば、「これを盗んだのか。」「確かに盗んだ。」と言う場合を考える。このとき、盗んだことに対して認めてはいるものの、それを盗んでもやむを得なかった理由を持っているかのような含みを感じる。このことから「確かに」とあるので、「部下たち」がだれも泣き言を言わな

ったことの事実を認めて、それに対しては望ましい結果であると捉えてはいるが、その後自分にとって不満足な事象があったというような含みを持っていると考える。

だが、そこまではいい。

「だが」と逆接を用いて、はっきりとこれからの展開がよくない方向へ向かっていくことを示している。

その後、私は夜になると、自分の目の前に、実に妙な物が出現するのに気がついた。

「夜になると」とあることから、朝または昼には出現しない。朝昼は戦いや部下の統率に忙しいからなのか。夜に出現するのはミステリアスな印象である。「実に妙な」とあることから、ミステリアスな印象が強く、また「妙」としていることから信じられない、おかしいと思っている。

それは焼きたての牛の肩肉だったり、薫製にした豚のもも肉だったりする。

ただの「牛の肩肉」や「豚のもも肉」ならまだしも。「焼きたて」であったり、「薫製」であったり近い時間に調理された料理であるのは、ねずみを食べようとしていた状況には明らかにおかしいもの、「実に妙な物」である。

ときにはゼリーに包まれた鶏の蒸し焼きのこともある。

珍しい食べ物が出てくることから、その「妙」さは一層増す。

それに杯になみなみつがれたぶどう酒とか、チーズの塊とか、露にぬれた果物とかが出てくるのだ。

飲み物、つまみ、デザートなども出てくる。「杯になみなみつがれた」「塊」「露にぬれた」とあることから、量・質ともに十二分の品物である。

私はつばを飲み、目をこすり、舌なめずりして、それにつかみかかろうと思った。

「つばを飲み」「舌なめずりして」とあることから飢えに飢えていた様子が分かる。また「目をこすり」とあるので夢幻ではないかと確認している。

彼らにもこの饗宴にあずかせようと思ったからだ。

食べる前に近習を呼び寄せるといふ気持ちをもっただけでも、部下思いの人物なのではないかと思う。

私は恥ずかしくて、彼らに、私の見たものの話をすることはできなかった。

「武将たるもの、空腹に打ち勝つことができないでは、何事もおぼつかない」と考えているので、そうあるべき自分が飢えてしまつて夢幻をみたなど思われてしまうのは、「恥ずかしくて」話せない。

ところがその後、夜になると、必ず豪華な饗宴が私のテーブルの上に繰り広げられる。

「豪勢な饗宴」が出現するのは、一日だけのものではなく、「必ず」夜になると」出現する。また「テーブルの上に繰り広げられる」とあることから、テーブル一面に料理が並べられていることが読み取れる。

私は肩肉にかぶりつく。

「かぶりつく」とあることから、これまでの飢えを満たすように豪快である。また、料理は視覚的な夢幻ではなく、触覚をともなった実体である。

そのあげく、腹はくちくなり、酔いも手伝って眠くなる。

「豪勢な饗宴」は、食欲を十分に満たし、さらに酔いまで引き起こすものである。「あげく」という語は「A、そのあげくB」の場合、A・Bともにマイナスの事象がくる。(例、口論になった。そのあげく殴り合いになった。)ここでは「豪勢な饗宴」にかぶりついたこと、さらに「腹はくちくなり、酔いも手伝って眠くな」ったことをともに情けないこととして捉えている。武将としてあるべき姿ではないと思っっているからだと考える。

なんと援軍が来て、とりでが救い出されるまで、私はこうして毎晩のようにならふく食べていたのだ。

「なんと」は何にかかっているのだろうか。「援軍が来て、とりでが救い出されるまで」にかかっていると考えるならば、その期間を強調していることになる。「私はこうして毎晩のようにたらふく食べていたのだ」にかかっていると考えるならば、その事実を強調することにな

る。

呼べば、せつかくの饗宴が煙のように消えるのではないかと恐れたからだ。」

「せつかく」とあることから、「饗宴」という恵まれた状況に対して、大切にしたいという気持ちを読み取れる。「煙のように消える」とは、跡かたもなく消えることである。最初に「饗宴」が出現したとき、近習を呼ぶと無くなってしまったことから、誰かを呼ぶと食べられなくなってしまう、と恐れている。

むさぼる——それが私の本当の姿だった。

「私の本当の姿」だとした「むさぼる」ということばは題名にもなっている。「人間は美德だけからできていると思っっているわけではない。人間とは複雑な化け物なのだ。」と前にあったように、人間をなす「美德」ではない部分、時に恐ろしい「化け物」に当たる部分を、モンテフェルトロでは、「むさぼる」とした。あなたたちはどうだ？と読者に語りかけているように感じる。

だが、私にはわかっていたのだ、自分の本当の姿がどんなものであるかということが。」

「乏しい食糧を兵隊に分けて、パンひと切れも口にされなかった」という廷臣たちが見ていた勇ましい姿はモンテフェルトロの表面に過ぎず、「せつかくの饗宴が煙のように消えるのではないかと恐れ」、「ただ一人で肉でも魚でもむさぼり食べていた」姿こそ本当の自分であると訴えている。この自分自身に対する、周りとの自分の評価の違いにモ

ンテフェルトロは苦しんでいたのではないか。

一人一人の心の中に、この饗宴も例の野鴨の贈り物であろうかという疑問が浮かんでいたが、それをあえて口にする者はなく、ただ暖炉の奥で鳴る夜あらしの音に耳を傾けていた。

「野鴨の贈り物」の話聞いた時、廷臣は「わが殿は善き心のほかは何も持っておられない」と考えた。しかし、サルツアナの戦いにおけるモンテフェルトロ公の、決して善き心だけ持っているわけではない本当の姿が語られたため、「あえて口にする者は」いなかったのである。

「この饗宴」とあるが、サルツアナの戦いにおける毎晩の「饗宴」なのか、それとも今ここで開かれたモンテフェルトロと廷臣たちとの「饗宴」なのか。後者と考えると、周りと自分の評価のギャップに苦しんでいた悩みを打ち明けることができたことから「贈り物」と考えられて面白い。しかし、そもそも饗宴とは豪勢な酒や料理で盛大にもてなす宴であること、全体を通して「饗宴」という語はいくつも出てくるがどれもサルツアナの戦いにおけるものであること、さらに一度もモンテフェルトロと廷臣たちの話を「饗宴」という語で表していないことから、前者であると考える。

### 三 考察

#### 「婪り」のテーマについて

本作「婪り」は『風の琴―二十四の絵の物語』（文春文庫）に収録されている短編である。十二の肖像画と十二の風景画のイメージを元に書

かれている。「婪り」は作品の主人公であるフェデリゴ・モンテフェルトロ公の肖像画を元に作者のイメージで書かれた。



本作はモンテフェルトロが廷臣たちに二つの話をするという構成になっている。

A、モンテフェルトロが体験した野鴨の恩返しを受けた話

B、サルツアナの戦いの話

Aは世界中の物語でよく見られる話型である。しかし、本作で重要なのはBである。AはBを引き出すための布石であると考えてよい。作中ではAを話し終えた後、廷臣たちは「わが殿は善き心のほかは何も持っておられないのでございますね。」とモンテフェルトロを称賛する言葉を発している。しかし、それに対して彼は「そう思われては困る。」と否定している。そのあとにBを話し始めていることから、Bの話は彼が伝えたかったこと、すなわち作者である辻邦生が伝えたかったことであると考えられる。

では、作者がこの作品で扱ったテーマは何だろうか。本文を見てみると、「人間とは複雑な化物なのだ。」というセリフがある。さらにその後ろには複雑の具体的な中身が記されている。中身を抜き出すと次のようになる。

- ・表面は静かでも、本当は荒れ狂った獅子
- ・雄やぎのように怒りっぽくても、内心は気弱
- ・普段は我慢強い温厚な男といわれているが、昔は血に渴いたおおかみといわれていた
- ・寡欲を説く欲のない男と思われているが、貪欲だからこそ寡欲を説いている

このような表と裏、寡欲と貪欲、温厚と癡猛、といった人間のもつ二面性がこの作品のテーマとなっている。

また、作品の元となったフェデリゴ・モンテフェルトロの肖像画からもこのことを考えることができる。先に示した図を見てもらえればわかるが、右半身が完全に隠れてしまっている。というのも、モンテフェルトロは槍試合の際に負傷して右目を失ってしまっている。よって、彼の肖像画は左半身のみを描いたものとなっている。この絵を見る限りでは、顔立ちの整った男性であるが、実は右目を失っているのである。作中の「——それが私の本当の姿だった。しかしだれもそう思わなかった。そう見えなかった。」というセリフは、この肖像画を見て作者がどう感じたのかを表していると考えることができる。